「藤原雅経」

― 新古今歌壇における位置とその交友関係 ―

国文学科四年A組（63）
松尾順子

はじめに

雅経は、嘉応二（一一七〇）年、刑部卿頼経の五男として生まれた。[1] 母は大納言頭雅の女である。氏は藤原であるが、兄宗長が家道を継いで難波家と称したから、雅経は別に一家を立てて飛鳥井といった。

祖父頼輔から蹴鞠で知られた家柄だけに、宗長・雅経二人も鞠にすぐれていた。承元御鞠記[2]によれば、当時の鞠の堪能を選び、上中下の三組を定められ、後鳥羽天皇、忠信、有雅、宗長、雅経、小紀山加良、寂応丸を上八人と定められたという一事によって明かである。中でも雅経は当代第一であったらしく、遊庭秘抄に

鬼鶏冠と申名木のおそろしき態に立たる人、不覚して座に入ける處に、雅経卿参じて彼かへでの五枝たる木のごとくさし出て有枝に、一足蹴て一の枝にあてて、延たる鞠次の二枝に當も、鞠を又延て次の三の枝に鞠あつる様に、五の枝までいつくしく蹴あてゝ延のべけるを、上皇も龍顔にゑみを含ませ給のみにあらず、頻に叡感ありけるに、見る者貴賤上下道俗男女目を驚かしけるとなむ。[3]

とあるによって推察せられ、更に一条兼良の享徳二年晴之御鞠記にもその趣が記されている。

難波、飛鳥井両家は蹴鞠の師範家となったが、難波家は間もなく没落した。即ち享徳二年晴之御鞠記に「難波の跡もなきが如くに成ぬれば、雅経卿の一流のみいやましに栄え侍る。いと有難き事にこ

そ」[4]とある。

尊卑分脈により、雅経には、教雅、教定、教経、女子（忠継朝臣室）、女子（城介義景妻）の五人の子女のあったことが知られる。[5]雅経の室は不明であるが、教雅、教定の母が大江広元の女であったことは、尊卑分脈により知られる。大江家系図の広元のところに、女子（参議藤原雅経室）とある。これが雅経の嫡妻であろうと思われる。この広元女との結婚がいつ行われたか、換言すれば、雅経はたびたび鎌倉へ下ったのであるが、そのいづれの時であるか、恐らくその最初の時、即ち建久年間のことであろう。革納別記建久八年二月二十五日の条に、

早旦自左兵衛督之許一裝束二具（束帯直衣）拜車等被レ調二送之一。此條將軍被レ成二猶子一之間、我上洛之程於レ事可二扶持一之由被二申付一之故也。[6]

とあって、既に鎌倉に長く滞在しており、将軍の猶子とまでなっていたことが知られる。

雅経と鎌倉との関係は、生涯を通じて注意されるが、最初何の目的で下ったかは不明である。しかし、後白河院院政における討幕派の中心人物の一人として活躍していた父頼経が、源義経等と結んで頼朝を討とうとした事が失敗して、長兄宗長と共に官を奪われて配流の憂き目にあっているにもかかわらず、その反対者である鎌倉幕府へ来て頼朝の猶子となり、しかも重臣広元の女を娶っているのは考えるべき点があると思う。

源家長日記によると、雅経は、建久八年（二十八歳）二月に、上皇の蹴鞠のお相手として鎌倉から呼び戻されて早速昇殿を許され、上皇の側近となっている。この時が後鳥羽院に仕えるようになった最初であろう。

歌人としてはどうであろうか。雅経の歌の最初に発表されたものは建久九年の鳥羽百首だと思われる。蹴鞠をもって院に仕えていた雅経は、どのようにして歌壇に登場し、どんな位置を占めていたのであろうか。新古今歌壇における位置とその交友関係を考察してみたいと思う。

一、歌壇登場とその位置

雅経は、正治二（一二〇〇）年九月三十日の院当座歌合に出詠し、以後活躍がめざましいわけであるが、彼の位置づけをするにあたり、正治二年後半の歌壇の催しを見ておきたい。

。九月三十日　院当座歌合　（桂宮本叢書　歌合14）

(1)題　月契多秋　暮見紅葉　暁更聞鹿

(2)作者　女房（後鳥羽院）　内大臣　権大納言忠良　沙弥釈阿

参議公経　左近中将通具　右近権中将定家　侍従雅経

春宮亮範光　能登守具親　散位隆信　相模　讃岐
民部少輔隆範　散位隆実　散位鴨長明

(3)判者　皇太后宮大夫入道俊成卿

。十月一日　院当座歌合　（群続409巻）

(1)題　初冬風　暮漁舟　枯野朝

(2)作者　公経卿　春宮亮範光　散位保季　侍従隆祐　安成　女房
能登守具親　左衛門尉藤季景　左近少将定家
散位鴨長明　散位宗長　前大和守公景

判者衆議判

執筆定家

九月三十日の歌合は、後鳥羽院の御所で催された三題各題八番の当座歌合で、後鳥羽院をはじめ俊成・定家ら左右各八人の歌人を集め俊成が判を加えている。

十月一日の当座歌合も院の御所で行われた三題十八番の小規模ではあるが歌合らしい歌合である。両歌合の作者は一応、摂門系、六条家系、御子左家系という集団に分けることができるが、作者個々について興味ある点が指摘される。九月三十日の歌合には三つのポイントがある。つまり、通親・通具、俊成・定家、隆信・隆範隆実の三組の親子がいること、女房歌人を呼んでいること、しかも雅経、範光、具親が出ていることである。女房歌人は当時大事にされたが、相模も讃岐も老令であるにかかわらず呼ばれている。相模はいかなる人物であるかわからないが、讃岐より前に名前があるところから、位か年令で上の人であろう。讃岐は、最初二条天皇に出仕し、崩後二、三年以後治承初年までの消息は不明である。建久年間には中宮（宣秋門院）に仕え、のち出家隠栖したが、正治初度百首にも出詠、千載集には四首入集している。そしてその活躍は建暦、建保の頃にまで及ぶ。この場に地下の長明が呼ばれていることは注目される。彼は誰かの推挙によって歌壇形成の当初から参加しているが、推挙した人はわからない。

俊成、定家、忠良、讃岐ら有名歌人に混って、この歌合以後活動がはじまる雅経や公経、具親、新古今集にその歌が入集していない相模、隆範、隆実らが加わっているのである。隆範は同年十二月九日の法性寺殿（兼実・良経）詩歌合に父隆信とともに出詠していることが明月記に見えるが、歌人としては、これら二度の歌合に出たにすぎないいわば素人とともいえる人である。即ちこのような傾向は十月一日の歌合にもいえる。最年少と思われる隆祐は家隆の長子で、承久の頃から作歌活動に入り、その歌は新勅撰集に一首採られているが新古今集には入集していない。元久期（正治二年七月～承元四年十二月）ではこの歌合に出詠したのみであるところから、彼の場合は、その場に居合わせたから呼ばれたという格好ではないか

と思う。安成というのが誰であるかわからないが、隠名をよく使うという慈円が、建久元年に「学生安成」という名前で歌を詠んでいるので、時代的なズレはあるが、一応慈円と見ておきたい。季景は院の北面の武士でその歌は新古今に一首採られている（雅経単独撰）。建仁元年八月三日の和歌所影供歌合の作者になっているが、歌人としてではなく廷臣者として生活してきた人である。宗長は雅経の兄であるが、歌人としての生活は知り得ない。公景は、千載集に二首の歌が見られるが新古今集には入集していない。

次に院第二度百首であるが、群書解題によると、十月乃至十二月の間に催された百首歌で、七―八月詠進された院初度百首、翌建仁元年六―七月の第三度百首（これは千五百番歌合となった）に比べて規模は最も小さい。春三題、夏二題、秋三題、冬二題、雑十題で各題五首づつ四季と雑とが半々である点は初度と三度の四季七〇首（その他は初度と三度で異なるがともに恋題を含む）であるのと相違している。作者は、後鳥羽院、慈円（神主康業の隠名で詠む）、範光、雅経、具親、隆実、家長、長明、季保、宮内卿、越前の十一名で、隆実（信実）以外は新古今集の歌人となっている。この百首の中からは新古今集に慈円三首、具親および越前各二首、後鳥羽院および宮内卿一首の計九首が採られている。

十一名中、初度百首と重復するのは後鳥羽院、範光、慈円の三名で、定家は何故か作者になっていない。この点からもいえるように、初度百首の場合は、権門系、御子左家系、六条家系というように専門歌人として分類できたが、第二度百首の場合は、六条家系は範光ひとりであるし、どれにも属さない新進・近臣歌人が目立っている。院の近臣として仕えていたと思われる具親がこの頃からすでに出てきているのはまず注意されるし、女房歌人二人は、この歌合に加わることにより本格的な活躍が始まる。

以上二つの院の当座歌合と第二度百首を見たわけであるが、これらは、近臣・地下・素人を呼んで気軽にやった多分に趣味的要素の強い歌合であったと言える。建仁元年以降頻繁に行われた歌合は、専門歌人をよりすぐった歌壇をあげてのものであった。しかしこの段階では、客観的には、専門歌人、宮廷歌人、近臣歌人が混迷状態にあるといえる。後鳥羽院の和歌への志向は建仁頃から伸びてゆくのであるから、この正治二年後半は、初度百首と建仁元年との間のワンクッションおいた時期といってもよいであろう。

このように見るとき、雅経がどのような状態の中から歌壇に登場してきたかがわかる。彼は、蹴鞠によって院の近臣となり、極めて私的性格の強い歌合に近臣歌人として出詠することにより、その頭角を現わしてくるのである。そして彼は、この時期以前の活躍が見られなかったにもかかわらず急速に伸びて行ったのである。では雅

経は、歌壇においてどのような位置にあったのだろうか。元久二年頃までの彼を追って行きたい。

建仁元年七月には寄人に召され、十一月三日、新古今集撰者となっているわけであるが、第二度百首以降、和歌所設置までの間、後鳥羽院を中心として行われた歌合で彼が作者となった主なものは、建仁元年二月老若五十首歌合、三月二十九日新宮撰歌合の二つである。

老若五十首歌合においては優れた成績を残し、忠良、定家、寂蓮に圧勝して、判者との結番を除外した場合の成績では勝三持二負三と、慈円、忠良についで第三位である。そして新古今入集総歌数二十二首中の九首までがこの歌合から入集している。

三月二十九日の新宮撰歌合には、新古今集撰集にたずさわった人々の中で秀能を除いた全員が参加しており、撰歌数五首以上の作者のうち院を除く四名はいづれも寄人であり、撰者としては定家がその中に入っている。雅経は三首（勝一持一負一）でうち一首は新古今に採られているが、通具が、四首も選ばれ、二首も勝を得ているのに比べると、必ずしもよい成績とはいえない。

和歌所が設置されてからは、八月三日の和歌所初度影供歌合と八月十五夜撰歌合に出詠している。しかしその成績は、八月三日の歌合の場合は持五負一、八月十五夜の撰歌合では、撰歌数は六首あるが、持三負三と、どちらも勝が一つもない。そして十一月三日には新古今集撰集のための院宣が下り、雅経も撰者の一人となったわけである。正治初度百首の作者にもなっておらず、建久年間においては歌人としての公の活動も見られない彼がなぜ撰者に選ばれたのであろうか。彼の任ぜられた事情については、融覚（藤原為家）より藤原教定（雅経の子）宛の書簡があり、それは新古今撰集の折の撰者選定の経過をよく伝え左の如くである。

衣笠前内府痢病脚氣計會遂遑乎有待之習今更添悲哀候於此道彌無堪能之仁候爲世爲道不可不歎爲之如何撰者已以其闕出來候歟御所望頗相叶其仁候歟新古今撰者沙汰之時土御門内府雖爲其仁依無大臣之例子息頭中將奉之至經經家卿以重代雖望申於歌不堪不可知優劣云々以有家朝臣被召加御歌親相公壯年淺位依重代并器量被清撰候且佳例也追元久家跡御競望之條爭無採用候哉……

九月十七日　　融覚

前左兵衛督殿（教定卿　雅経卿息）

即ち続古今集撰集の折、撰者の一人衣笠内大臣家良が辞じた折、融覚より教定に宛て認められた書簡であるが、その中で新古今集撰集の折の撰者選出の経過にふれ、雅経は壮年（建仁元年三十二歳）で位も低かったが（右近権少将、撰者の中では最も低い位）重代の上器量もあり、よって選ばれる所となった事が知られる。歌道におい

ては重代とはいえないが、蹴鞠という家柄と彼の器量によって、他の専門歌人達と肩を並べるようになったのである。撰者になることによって彼の歌壇における位置も一応固定したといえるだろう。とにかく彼は、破格の名誉を得たのである。

次に、建仁二年以後の、歌人と撰者としての雅経を見て行きたい。

建仁二年三月二十二日、院は真に心にくき歌人六人を召して、三体六首の和歌会を催されたが、明月記に「有家、雅經有僅不參（所勞云々）」とあるように雅経は辞退している。撰者になって歌壇における位置も固定し、その任を果たしつつあった時であるが、三体詠み分けは自信がなかったのであろうか。建仁二年末頃、歌合として一応完成されたと言われている千五百番歌合からは、彼の歌はわずかに一首入集している。

元久元年には、十一月十日和歌所において催された春日社歌合に出詠している。この歌合は、新古今集の部類時代に行われた歌合、歌会を通じて、十四首という最多数の入集歌をもつ歌合であった。源家長日記が、

此つかひはおなし程のよみくちと、世の人のてつかひなおおもへるをえりあはせられたりしかは、いつよりも此たひはまけしはやなと、たれも〳〵思あへり

というように、当時有数な歌人を選抜し、しかも実力伯仲といわれる対者を結番させ競わせたのであった。この中に多くの秀歌があったことは、通具、有家、保季、雅経、丹後（源家長日記には通具はなくて成茂、忠経、家隆が加わる）に御感の御教書を賜わっている事がこれを証明している。雅経の歌は、新古今集冬の部に「春日社歌合に落葉といふことをよみて奉りし」という詞書で慈円以下七人の中に入っている。

うつりゆく雲にあらしの声すなり
ちるかまさきのかつらきの山

対者通具に対して勝を得ており、判詞は「ちるかまさきのかつらきの山、哥のたけ及かたくきこゆ、以左為勝」とある。雅経の歌が多くの「よみくち」といわれている人に混って、秀歌の中にあるのは注目してよいであろう。

翌元久二年三月二十六日、新古今集はその成立を遂げて、同日夜半竟宴が行われたのである。しかし、新古今和歌集は、この竟宴の日において確定的な成立を見たものではなく、この後も切り継ぎによって、歌の出入が行われることとなるのである。明月記に見える切り継ぎの記事によっても、雅経は特に召されて、多くの出入について院の御相談にのっている。

彼が撰者として立派にその使命を果したことは、五撰者の撰進歌

の入集数を見てもわかる。実際の撰進歌数はわからないが、後藤重郎氏「撰者名註記一覧表」（『新古今和歌集の基礎的研究』昭43塙書房）の底本「穂久邇文庫蔵本」（甲）によって、撰者名註を集計すれば次の如くである。

定家　八六三　家隆　八五六　雅経　七八三　有家　五五六　通具　二七八

定家・家隆・雅経の御子左家系の撰者の果している役割が圧倒的に強く、六条家系の有家と通具は同じ撰者でありながらも弱体であったことが知られる。右の撰歌数が、撰者の力量を示す絶対的なものとは決して言えないが、撰歌態度の一往の方向を示していることは、認められるのではないかと思う。

雅経の撰歌傾向であるが、千五百番歌合における彼の態度がその一端を示していると思われる。[7] この歌合からの新古今集入集という面から見れば通具・公経・通光・具親など年令層の若い新進歌人の登場が注目されるのである。通具は、新古今入集歌数十七首中この歌合からの入集歌数が十二首、公経は十首中六首、通光は十四首中三首、具親は七首中四首と、三人が50％以上の入集率を示している。それでは、この四人を雅経は撰者としてどのように評価したのだろうか。

通具の場合の撰者名註をみると、有家三、定家十、家隆七、雅経八となっており、雅経が御子左家系の撰者とともに多く撰歌している事が知られる。公経は定家四（単独二）、家隆二、雅経四（単独二）であるのに対して、通光は、有家一、定家四、家隆三、雅経四で同傾向ではない。具親の場合には、定家二、有家一、家隆三、雅経三となる。以上でわかるように雅経は、御子左家系の撰者とともに後鳥羽院の周辺歌人として登場してきた新進歌人を積極的に認めたと言えるだろう。

蹴鞠の家柄の近臣歌人として登場してきた雅経は、歌壇の中核となっていた俊成一門の歌人達に互して撰者となり、その器量をいかんなく発揮した。定家らのような位置は占め得なかったし、その存在もまた傍流ではあったが、近臣歌人としては、人並以上の活躍をしたと言えるだろう。

二、交友関係

定家との関係については、松永茂雄氏が「藤原雅経について」（『国文学論究第五冊』昭12・6）において述べられているように、最も親しい先輩として、常に喜びや嘆きを共にし、明月記には到る所に雅経に関する記事が見られる。しかし、彼の交友関係には注目すべき点が他にある。それは、鴨長明と藤原秀能という地下の寄人

と親しんでいたことである。

雅経と長明の親交は、正治二年、二人が院の当座歌合に加わった時から始まったと思われる。長明は、久寿二（一一五五）年賀茂社祢宣長継の二男として生まれた。勅撰作者部類によると、彼は応保元（一一六一）年十月十七日に中宮叙爵によって従五位下になっている。文治三年、彼の三十三歳の時には千載和歌集が成り、彼の歌が一首選入せられた。これについては、彼は無名抄の中に当時の心境を自ら述べている。

千載集に予が歌一首入れり。「させる重代にもあらず、よみ口にもあらず。又時にとりて人に許されたる好士にもあらず。しかるを一首にても入れるはいみじき面目なり」と悦び侍しを……

この謙遜した態度は故筑州に「いみじき事也」と言わせている。これは当時の長明の心持をそのまま現わしたものであろう。そしてこのわずかな言葉の中に、歌に対する当時の彼の考えも、歌壇における地位も暗示されていると見てよいであろう。青年期から俊恵について学んでいた彼が、いよいよ歌をもって身を立てようと思ったのではないだろうか。

新古今時代に入ってからの彼は、正治二年九月三十日及び十月一日の院の当座歌合をはじめ、第二度百首と、仙洞歌壇の活動の当初から参加している。そして建仁元月には寄人に召されているのである。源家長日記に、

……のちに隆信朝臣、地下に鴨長明、藤原ひてよしめしくはゝる。又めさるへき人々両三人侍よし申人々はへれは、摂政殿、三位入道殿とはれ侍き。皆めさるへきよし申させ給しかとも、なとやらんさたもなかりき。

たかのふのあそむはしめてまいりしよ奏し侍し歌、

うれしくも和歌のうらかせ閑にて
　ちよへむたつのかすにいりぬる

鴨長明参りしよの歌

我君のちよをへんとや秋津洲に
　かよひそめけん海士の釣舟

藤原秀能まいりしよの歌

つもりゆく限りもしらぬ君か代に
　よろつよかけて和歌のうら風

とある。

長明にとって寄人になったことは、歌壇的に彼の地位が確認されたことを意味するのでおそらく彼は、素志を達し得た満足をもってこの数年間を送ったことであろう。

後鳥羽院歌壇は、正治二年院初度百首以後、九条家歌壇を形作っていた定家、家隆らの中堅歌人を吸収し、それを中核として大規模な

歌人結集が行われ、その盛況を見ることになるのである。歌壇の、洗練された感覚と高度の教養を共有する密接な集団的雰囲気は、傍流歌人にとって「ふつと思ひも寄らぬ事のみ人毎によまれしかば……恐しくこそ覺え侍しか」と言われるばかりであった。

長明は、後鳥羽院歌壇の中心をなす和歌所に、寄人として活躍したのであったが、新古今集撰にはあたることができず、元久二年三月二十六日の寛宴にも出ていない。ともかくも後鳥羽院に認められて和歌所の寄人に召されたという点に、当時の歌壇が長明に許した極限が示されているといえる。

長明は、元久元年の春五十歳で出家し、出家後は自ら蓮胤と称した。そして彼は、出家しているにもかかわらず、建暦元(一二一一)年、雅経の推挙によって鎌倉へ下向している。すなわち、吾妻鏡建暦元年十月十三日の条に、

鴨社氏人菊大夫長明入道法名蓮胤。依二雅經朝臣之擧一。此間下向。奉レ謁二將軍家一。及二度々一云々。而今日當二于幕下將軍御忌日一。參二彼法花堂一。念誦讀經之間。懷舊之涙頻相催。註二一首和歌於堂柱一。

草モ木モ靡レ秋ノ霜消テ空キ苔ヲ拂ウ山風

とある。

この旅行に関しては菟玖波集(十七羇旅)に、

參議雅經と伴ひて東へまかりけるに、

宇津山を越え侍るとて楓を折りて

むかしにもかへてぞ見ゆる宇都の山　　鴨長明

これに蔦の紅葉を打ち添へて

いかで都の人につたへん　　參議雅經

とあって、雅経も同道したことが知られ、九月頃下向したと思われる。明日香井集に、

九月十三夜に、すゝかの関にとまりてよめる

わかこゝろいかにすゝかのせきのとに

名をとゝめたる月をみるかな

とある。年代は不明であるが、今日知られる資料によれば、九月に旅路のあったのはこの時のみで、この歌は建暦元年のことと思われ、九月十日頃京都を立ち、下旬鎌倉についた。十月頃は共に鎌倉にいたであろう。長明は十三日鎌倉を発足し、下旬には関の清水を尋ねている。すなわち十月下旬京都へ帰ったろうと思うが、雅経が同道したか否か不明である。

以上のことから、雅経と長明の親交が、長明遁世後も何らかの形で続いていたことがわかる。

次に新古今集の撰者と歌人という面から二人を見てみたい。長明は無名抄に自ら、

新古今撰ばれし時、この哥石川やせみの（をがはの）歌入れられたり。「いと人も知らぬ事なるを」と申す人などの侍けるにや。すべて此度の集に十首入り侍り。これ過分の面目なる中にも、此哥の入りて侍るが、生死の餘執ともなるばかり嬉しく侍るなり。但し、あはれ無益の事かな。

と記している。新古今集に採られた彼の歌十首は、

366 秋風のいたりいたらぬ袖はあらじ
　たゞわれからの露の夕ぐれ（有）

397 詠むればちゞに物思ふ月に又
　わが身一つの峰の松風　（有定隆雅）

　　嘱中ノ夕といへるこころを

964 枕とていづれの草に契るらん
　行くをかぎりの野べの夕ぐれ（雅）

993 袖にしも月かゝれとは契りおかず
　涙はしるやうつの山ごえ

1202 たのめおく人もながらの山にだに
　さ夜ふけぬれば松風のこゑ

　　題不知

1318 ながめてもあはれとおもへおほかたの
　空だにかなし秋の夕暮

　　和歌所歌合に、深山曉月といふ事を

1521 よもすがらひとりみ山のまきのはに
　くもゐもすめる有明の月　（有雅）

　　身ののぞみかなひ侍らで、やしろのまじらひもせでこもりゐてはべりけるに葵をみてよめる

1776 みればまづいとゞ涙ぞもろかづら
　いかに契りてかけはなれけん　（定隆雅）

　　鴨社歌合とて、人々よみ侍りけるに月を

1894 石川やせみのをがはのきよければ
　月もながれを尋ねてぞすむ　（雅）

であるが、これを見ると、新古今撰入に、雅経の力の大なるを思わざるを得ない。まして無名抄に「生死の餘執ともなるばかり嬉しく侍る」といった「せみのをがは」の歌は雅経ただ一人によっているのである。このことは、鎌倉下向を考える上に一つの暗示となるかもしれない。若き将軍実朝と老令の長明が会見し、歌人として歌も詠んだことの裏には、雅経がいるのである。下向の目的が何であれ、その存在は大きい。

歌壇において長明は、雅経同様、傍流であった。貴族社会が長い間に築きあげた因習の殻のごとき歌壇において、身分の低い、しかも芸能のすぐれているものの置かれる位置というものは我々の想像

に難くない。院の当座歌合で初めて顔を合わせたであろう二人の間には、互いにひかれ合うものがあったはずである。

次に秀能であるが、彼は、鎮守府将軍藤原秀郷の後裔、河内守秀宗の次男である。尊卑分脈によって生年を逆算してみると、寿永三（一一八四）年となる。武の家に生まれた秀能は、幼時より土御門通親家に仕え、十六歳の正治元年、後鳥羽院の北面の武士として召される事となった。通親の推挙と思われる。当時既に、作歌は相当の域に達していたらしく、翌年早くも御会に詠出している。即ち家集に「正治二年二月八日和歌所当座御会に」と題して、

やまのはにあさゐる雲をたちこめて
深くもみゆる春霞かな

さくら花にほはぬ宿のかげならば
なにを便に人はとはまし

あけ渡るゆらのみなとやかすむらん
雲にこぎ入るあまの釣舟

武蔵野や草のいほりもまばらにて
衣手寒し秋の夕ぐれ

の四首が見える。しかし、二月八日現在、和歌所は設置されていないし、この日御会が催された事実も見出せない。故にこれは「正治二年二月八日……」という日付がまちがっているのではないかと思う。

秀能の歌壇的地位は、翌建仁元年に大体決定したといってよい。家集によると、正月晦日の院当座御会、二月一日、六月二十日の同当座御会、六月二十二日には、院のみならず土御門天皇の小御所歌合に出詠、六月二十六日鳥羽殿影供歌合、八月十五夜撰歌合、八月二十一日新宮当座御歌合、九月十二日和歌所当座歌合、十二月二日影供歌合、十二月八日石清水御歌合等の歌会、歌合に出詠、いずれも歌壇の耆宿と同座している。そして、七月に設置された和歌所に、寄人として、後日長明らとともに追加された。建仁元年における歌壇の年令関係を揚げると、俊成88、寂蓮64、通親53、長明50、有家48、慈円47、家隆44、定家40、良経33、雅経32、通具31、秀能18である。弱冠十八歳の秀能の歌壇進出はまさに彗星の観がある。

秀能の歌才が誰によって培われたかは不明である。土御門家伺候時代、そこに出入する歌人名流によって啓蒙されたものであろうか。ともかくも彼の父祖に歌人は見当たらず、その師も明らかにし得ない。

そしてこの年、雅経と秀能の親交が如願法師集によって知られる。即ちそれは寄人になる以前のことで、詞書きに、

建仁元春比二條前宰相雅経少將と申し時ともなひて百首歌よみ侍し時春たつ心を

しもかれのふゆ野にたてしけむりより
かすみそめたるはるのあけほの　346

とあり、一緒に百首を詠んでいる。その他に、建仁元年として、

二條前宰相雅少將と申し時ともなひて百首歌よみ侍し

こそゆきにかはらすなからにほふなり
みねたちならす花のしらくも　388
ゆく人もたちとまるへくにほはなん
さくらふきまくはるのやまかせ　389
たかさとのはなのこすゑにいとふらん
なをふきすきぬしかのやまかせ　390

二條前宰相雅少將と申し時哥よみ侍しに

みそきかはかはせのなみもたちかへり
あきやきぬらんみちしはのつゆ　466

二條前宰相雅少將と申侍し時の百首に

大かたのあきをつらしとうらみても
こゝろのほかのそてのつゆかは　490

二條宰相少將と申し時ともなひて哥よみ侍し

みなれさほさすやかはせのいかたしは
なみにいくよの月を見るらん　519
ものゝふのやそうち人のうつころも
ひとりふしみのねさめにそきく　520

二條前宰相雅少將と申し時の百首哥に

鴈かへるみねのかすみをもる月や
はれぬおもひのゆくゑなる寛　698

暮春藤

ゆく人も猶たちかへりおる物を
はるのみなとにのこるふしなみ　699

二条宰相雅少將と申時百首哥に

いはしろの松にはかせのふきむすひ
とけてねぬよにむかしをそおもふ　797

というように、百首を詠んだ時の歌が十一首見える。この他にも、

建仁元年二条前宰相雅少將と申時住吉にまいりて哥よみ侍し時社頭述懐といふことを

おもふことも神のこころもはるゝまて
ふかはなをふけわかのうらかせ　891

として一首あるように、二人で住吉へ出かけたことがわかる。年代不明のものとしても、

二條前宰相少將とて侍し時かものはしもとの歌合に　河上千鳥を

冬河のかはかせさむみつらゝゐて

あさせしらなみちとりなくなり　556

二條前宰相少將と申し時哥よみ侍しに戀のこころを

わかそてはなにはのうらのうつせかひ
あふよをなみのしたにのみして　635

たのめこし人はふゆのゝあさちふに
そてはあきなるつゆそをきける　636

新古今

人そうきたのめぬ月はめくりきて
むかしわすれぬよもきふのやと　637

の四首が見える。

百首歌を一緒に詠んだというだけでも、二人の親交の深さがうかがえるが、それ以後も何らかのかたちで続いていたらしく、元久二年には定家、具親、清範等と嵯峨へ紅葉狩に行ったことが明月記に見える（十月八日の条）。

雅経は、定家は先輩として、具親や清範は同僚として、それぞれに交友があったが、秀能との場合は、彼を新進歌人として引き立てようという強い信念からではなく、兄貴と弟というような気軽なものではなかったかと思う。三十二歳とはいえ、歌壇においてはまだ若輩であった雅経は、年令的な面からも秀能に親しみを感じたであろう。

以上、長明と秀能の二人を見たわけであるが、ここに、雅経を中心とするひとつの関係、雅経―長明―秀能、のあることが明らかにされたと思う。それは、雅経、長明、秀能がともに歌壇の傍流であったことと、貴族社会から半分はみ出した格好になっている雅経の生き方によって、結びついたものであると思われる。

注（1）尊卑分脈（国史大系本）による。

（2）承元御鞠記　群書類従（巻353）による。

（3）遊庭秘抄　群書類従（巻355）による。

（4）享徳二年晴之御鞠記　群書類従（巻353）による。

（5）明日香井集（私家集大成本）に「元久元年六月の比より女子（中将忠嗣朝臣室産十三）わつらふ事ありけるに、七月七日……九日つゐにかくれ侍にけれは」とあるので、忠嗣朝臣室となっていた女子もあったのではないかと思う。それが夭折したので分脈にはないのであろう。こうして六人の子女は知られるが、その他にはまだ所見がない。

（6）久曽神昇著「崇徳天皇御本古今和歌集」（昭15　文明社）の解題「雅経伝」による。

（7）有吉保著「新古今和歌集の研究」（昭43　三省堂）第一編新古今集の歌壇史的考察第三章新古今集撰修期の歌壇Ⅳ千五百番歌合と新古今和歌歌集参照。